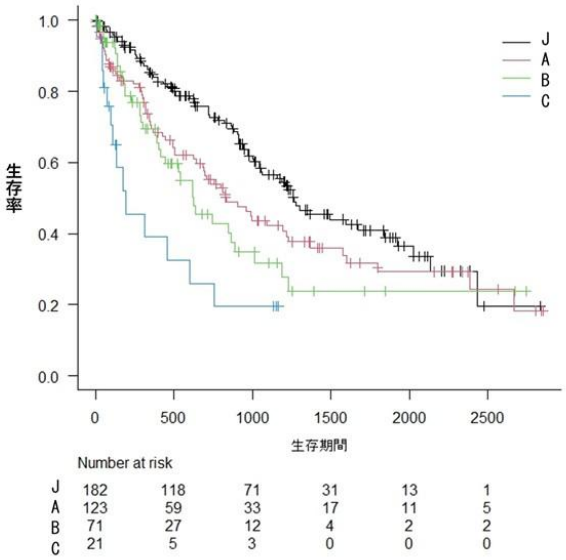
MD-08

透析を要する慢性下肢虚血（CLTI）患者における自立度の予後への影響

奥山 由美[1]、宮本　明[2]
[1]総合高津中央病院、[2]総合高津中央病院

目的：透析中の慢性下肢虚血（CLTI）患者において、自立度が生命予後に与える影響を検討する。方法：2016 年から 2021 年に当院で血管内治療（EVT）を受けた透析 CLTI 患者 397 例（平均年齢 71.3±10.0 歳、男性 306 例）を対象とした。患者を自立度に基づき、生活自立（J 群）、準寝たきり（A 群）、寝たきり（B 群）、重度寝たきり（C 群）の 4 群に分類し、各群の 1 年生存率を比較した。結果：各群の患者数は J 群 182 例、A 群 123 例、B 群 71 例、C 群 21 例であり、1 年生存率はそれぞれ 84%、69%、68%、37%であった（p<0.001）。自立度が低下するほど、生存率は有意に低下した。考察：自立度の低下は生命予後の悪化と強く関連していた。特に C 群（重度寝たきり）では、EVT を行っても 1 年生存率が著しく低く、治療適応を慎重に検討すべきである。結語：透析 CLTI 患者において、自立度は予後を左右する重要な因子であり、EVT の適応判断における基準の一つとして考慮すべきである。